きほく通信

第72号
2018年
8月22日
発行

難病
患者家族会
きほく

【会　長】神森 和子
紀の川市中三谷
【相談室】０７３６（７５）４４１３
【事務局】〒６４９-６６１２ 紀の川市北涌３７１
森田方 TEL０７３６（７５）４４１３

赤星さんの車椅子贈呈

元阪神タイガースの赤星憲広さんが、現役時代に体の不自由な女性ファンの応援に支えられたのをきっかけに始められたのが車椅子の寄贈です。

その後の盗塁数と同数の３０１台の車椅子を現役時代に寄贈され、引退後も続けられているのが「Ring of Red～赤星憲広の輪を広げる基金～」で、もうすでに６００台を超える車椅子が寄贈されています。

今回、この車椅子が私ども紀の川市難病患者家族会「きほく」に贈呈されました。

この話があったのは５月末で６月１０日までの回答期限だったため６月２日に開催された総会交流会で貸し出し対象者（神経難病患者男性）を決めさせていただきました。

利用者の男性会員から次のようなお礼の言葉が届きました。

『自分がまさか車椅子に乗る身になるとは思いませんでした。運動神経はあまり良い方でなかったですが、大きな病気やケガをしたこともありませんでした。ボールを蹴っていると地面に右足が引っかかる、駆け足しても地面に右足が引っかかる、これが最初の症状でした。

46歳の初夏でした。パーキンソン病と診断されました。足または手の左右どちらかから始まり、だんだんとゆっくり全身が動かせなくなる進行性の病気です。発病以来10年ほどはほとんど車椅子は必要ありませんでした。それ以降は少しづつ車椅子のお世話になる時間が増えてきました。

私の病気は階段はのぼったりできることがありますが平坦な道が歩けなかったり、日内変動が激しくてさっきまでほとんど身動きができなかったのに薬を飲んで半時間後に急に早足で行くことができたりします。ですから仮病と思われるときもあります。

そんなちょっと不安定な病気の患者にとって車椅子はとてもありがたいことです。この車椅子は折りたためること、介護者の握るハンドル部分が折りたためることにより小さな車でも無理なく積める、素材はアルミ合金で軽量であるため調子のよいときなら駅の階段は自分で持っていき平坦な部分では乗って手でこぐことも可能です。車椅子寄贈ならもっと安い車椅子でもいいのでしょうが、そうではなくより便利に使ってもらおうとの赤星選手の心意気が伝わってきて大変うれしい気分になります。

どうも本当にありがとうございます。今後とも赤星様のご活躍をお祈り申し上げますとともに、患者会きほくにも深く感謝申し上げます。』

事務局

利用者に届けられた車椅子赤星号（写真左）

毎日新聞（7月12日付）和歌山版に掲載された「難病患者へ赤星の車椅子」

難病男性へ「赤星の車椅子」

紀の川市患者家族会きほくに寄贈

プロ野球・阪神タイガースで活躍した赤星憲広さんらが進める社会貢献活動「リング・オブ・レッド」の一環で、車椅子１台が９日、紀の川市難病患者家族会きほく（同市北涌）に贈られた。

活動に協力しているスポーツニッポン新聞社を通じ、県内の毎日新聞販売店で構成する県専売会と県毎日会が仲立ちして贈った。県毎日会の宮井良継会長（宮井新聞舗社長）とスポーツニッポン新聞大阪本社の岸本博志販売第一部長がこの日、「きほく」の森田良恒事務局長（67）に手渡した＝写真。「きほく」は、神経難病を発病した50代の男性会員に使ってもらうという。

車椅子は、赤い背もたれと座面が印象的で、赤星さんのサインが背面に書かれている。森田さんは「男性の母親にも障害があり、大変な状況にある。車椅子は大変ありがたい」と語った。

赤星さんは、車椅子の寄贈活動を現役時代の2003年に始め、引退後も基金を設立して続けている。　【麻生幸次郎】